

やまなし
医療最前線
救急現場 24時
県立中央病院から

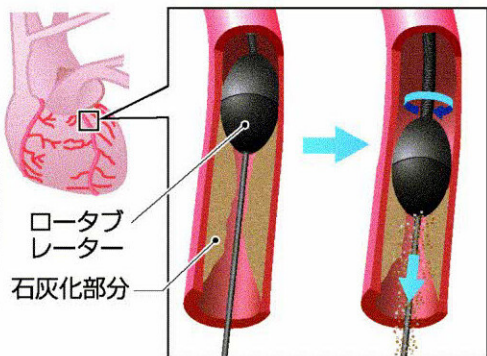
〈160〉

日本における死亡原因は第1位ががん、第2位は心筋梗塞などの心疾患。県立中央病院循環器内科部長の佐野圭太医師によると、心筋梗塞や狭

糖尿病の80代男性が、透析病院で透析中に胸の痛みを訴え、救急搬送された。冠動脈（心臓の血管）カテーテル検査では、血管内にたまった沈着物が石灰化して硬くなり、かろうじて血流が保たれている状態と判明。脳梗塞の既往もあり、自分の体の血管を使って置き換えるバイパス手術は難しい。点滴や内服で体調を整えた後、非常に硬い冠血管に、「ロータブレーター」を用いて血管を通し、ステント治療を実施。術後2日目は元気に退院した。

動脈硬化 沈着物が石灰化 ドリルで削り血流改善

ロータブレーション
治療の仕組み



心症を引き起こす動脈硬化は、悪玉コレステロールの血管への沈着などにより進行する。重症化すると、血管内が

石灰化して骨のように硬くなる可能性がある。そうなる通常のカテーテル治療で用いるバルーンやステント（金属製の網状のチューブ）が通過できず、血流を取り戻せない。

そこで、有効なのが「ロータブレーション治療」だ。血管の流れを良くするために、カテーテルにロータブレーターと呼ばれる硬いダイヤモンドの粒をコーティングした直径2ミリのドリルを装着。血管を通り、石灰化した部分を削っていく。

今回は、脚の付け根の血管からカテーテルを入れ、ロータブレーターで石灰化部分を削り通り道を確認した上で、ステントを入れ血管を広げる治療を実施。手術は1時間程度で無事に終了した。非常に強力な治療だが、「正常な血管を傷つけたり、ドリルが詰まります

取れなくなったりする危険がある」と佐野医師。安全性確保のため、年間30例以上の心臓開心手術、200例以上のカテーテル手術の実績がある施設にのみ、使用が認められている。同病院は施設基準をクリア。2016年度以降、実施例を増やし、昨年度は6例行った。

同病院は、全県から心筋梗塞、狭心症の患者が搬送され、昨年度は204例のステント手術を実施。そのうち102例が緊急手術で、うち56例がドクターヘリやドクターカーを含む救命センターとの連携によるものだった。

現在は症例を選び、万全の準備の下でロータブレーション手術を行う。佐野医師は、「さらに習熟を重ね、緊急手術時の使用にも対応できるようにしたい」と話している。

Ⅱ第2、4木曜日に掲載